

『白氏五妃曲』について^(注一)

太田 晶二郎

岡山大学附属図書館^(三)を訪うた。「池田家文庫」―旧藩主家の記録・典籍等―の調査を目的として。これには「土肥秘函」^(四)＝土肥経平文庫も含まれてゐて、文学・有識等関係の図書も少くない。^{(五)(六)}

豫め池田家文庫の目録^(七)を検して、私は、土肥文庫の部に、

「白氏五妃曲 一」^(八)

とあるのを目を撃たれた。『大日本史料』に、慶長八年、

「白氏文集中ヨリ、五妃曲ヲ選出シ、一字板(＝活字版)ヲ以テ

印行セシメ給フ、」^(一〇)

と為し、『慶長日件録』・『言経卿記』等を引く。李氏朝鮮から活版術が伝はつて、朝廷に於ても、主として慶長年間、後陽成天皇の勅旨により、幾種かの典籍が活印され、之を慶長勅版と呼んで、其の实物古活字印本も稀には遺存して珍貴とされてゐるのであるが、白氏五妃曲も即ち慶長勅版の一つに当る。しかし、その遺品は今日までのところ知られてはゐないやうである。そこへ、池田の目録に五妃曲を見つけたから、むね高鳴つた。但し、其の目録は刊・写の別を記載せぬので、物を見するまでは、果して勅版本であるか否かが不明である。

岡大図書館に於て、期待と不安の多少の時間の後、其の本は眼前に現れた。結果は―勅版発見の夢は破れたつたけれども、まさしく「白氏五妃曲」と題名あり、此の写本は、慶長勅版白氏五妃曲の内容を伝へるものとして、勅版本自体がいつの日か発見されるまでは、貴重な資料であり得るであらう。この土肥本五妃曲は、万治三年に写した由^(一八)の奥書を有するが、多分、本奥書で、実際は更にのちの転写であらう

か。又、慶長勅版を写したと明記されてゐるわけではない。それにも係らず、敢て、私が、これを勅版に源してゐるとする所以は、

(一) 五妃曲は、白楽天の『文集』から、五人の後妃それぞゝを題材とした歌詩を抜き集めたものであるが、此のやうに抜き出しをし、「白氏五妃曲」と命名したのは、慶長日件録に

▲白氏五妃曲トイフ命名デ、白氏文集ノ中カラコレコロノ詩ヲ選ビ抜カレテ、活字デ印刷サレル^(一九)

と述べる文意を味ふに、印刷に付することと共に、選抜・命名も此の際に始めて行はれたものと取れる。言ひ換へると、慶長勅版以前から既に白氏五妃曲といふ組み物が存在してゐたのを此の時印刷に付しただけといふことではない。それゆゑ、

白氏五妃曲――慶長勅版――土肥写本

▲点線のやうに、土肥写本が慶長勅版に源流しない別系統の写本であること▽は、殆ど有り得ぬと私は信ずる。

又、(二) 土肥写本の五妃曲の排列は、

- ① 上陽白髪人
- ② 李夫人
- ③ 陵園妾
- ④ 長恨歌(并ニ長恨歌伝)
- ⑤ 王昭君(二首)

昭君怨

であるが、是れは、言経卿記に勅版白氏五妃曲の篇目を記した順序(二二)と一致符合してゐる。土肥本が慶長勅版の転写であることの一証拠とならう。

かくて、久しく佚して知られぬ慶長勅版白氏五妃曲の倂を今、土肥写本によつて伺ひ得ることになつたとすれば、その目は右に示した如くであり、⑤の王昭君が白氏文集巻第十四に見える

「王昭君二首」両方と、
巻第十六にある

「昭君怨」と、合せて三首であることも初めて分つた。(二三)固より又、五妃曲所収の篇目が夙に文献によつて明かであつたとしても、いかなる本文か、系統や字句の一々に至つては、其の物に就かずしては知るべくもなかつたのである。(二四)

次に、五妃曲各篇の梗概を挙げると、かの唐の玄宗皇帝と楊貴妃との、歡樂と悲惨とを極めたロマンス④長恨歌は、今さらに説くに及ばぬとして、

①上陽白髮人は―その楊貴妃が玄宗の寵愛を独占し、他の美しい宮女は、貴妃に妬まれて、上陽宮に隔離監禁され、寂寥の青春を空闊に過して、遂に白髮の老女となつた、かういふ哀れな女的身の上を詠んだのが、是れである。

②李夫人―漢の武帝、李夫人を熱愛したけれども、夫人は早く世を去つてしまつた。武帝が、亡き李夫人を慕うて已まず、反魂香を焚かせて其の魂を喚び反しなどした悲恋の情をうたつてゐる。

③陵園妾―是れも上陽人と同様、美しい宮女が、妬まれて讒言され、陵墓番に左遷されて、ぶきみな御陵の境内に幽閉された。

此の薄命な女の怨みを述べたもの。(二六)

⑤の王昭君は―漢の元帝の宮女。帝は、多数の宮女の中から、寵幸しようとする女を選択するのに、宮女各々の肖像画をかゝせ、その肖像によつて、美しい女を召し出した。宮女は皆、画家に贈賄して、我が肖像を实物よりも美しく画かせた。たゞ王昭君だけは、自分の容貌に十分自信が有つたものだから、賄賂などは使はなかつた。結果は、絶世の美人王昭君が却つて醜女に描かれ、遂に、みかどに選び取られて寵愛を得ること無かつたといふだけですまず、匈奴の单于が元帝に「漢の宮女を、一人、分けて欲しい」と申し入れて来た時に、帝は、△あの醜い肖像の女なら惜しくもない▽と思つて、王昭君を单于に与へてしまつた。昭君、遠く長城の北、むくつけき匈奴の間へ連れ去られたまゝ、そこで不幸な一生を終へたのである。(二七)

以上のやうなのが五妃曲で、前に△五人の後妃を題材とした歌詩▽と謂つて置いたが、単にそれだけではなく、いづれも皆、大体に於て、△薄命・悲運の女性の生涯をうたつて人をして涙そゝがしめるもの△といふ点も一貫してゐる。(二八)

そも、慶長勅版とは、他は、

錦繡段 勸学文 日本書紀神代卷 古文考経(二九)
職原抄 長恨歌・琵琶行

であり、全て既成の古典で、新しい著述・編纂は存しない。しかるに、白氏五妃曲は、(一)此の印行に際して特に、選抜・組合せ乃至新しい書名設定が為されてゐる点、多少の能動性・創作性を認めるべきであること他に異なるものが有り、又、他の慶長勅版の書の内容は、さすが勅版にふさはしく、勸学文だ職原抄だと、堅いものばかり。僅かに長恨歌・琵琶行は、情趣の深い長詩であるが、此の二篇を取上げ組合せるのは前々から行はれてゐたこと(三〇)であり、それと違ひ五妃曲にあつ

て、(二)今、能動的な選択によつて、主情的な詩ばかりを組合せ刊行したことは、慶長勅版の中で一異彩を放つてゐて、勅版の認識・評価に影響するところ小々ならず、又、ひろく近世の藝文発達の歴史の上でも注意して見るべき現象かと考へるのであるが、此のやうに意義の有る白氏五妃曲の伝存せぬを遺憾としてゐた処に、転写本ながら、其のおもかげを見得るやうになつたことを、自分一己はひそかなる悦びとする。

○

土肥本の白氏五妃曲には訓点・仮名が附いてゐるが、もとの慶長活字印本は白文であつたはずで、加点はのちに施され、奥書に、(三三六)天皇が勝定院ノ梵窠カラ徴シタマウタ本ノ訓点デ、上皇ガ善イ点ト御褒メニナツタよし見えてゐる。

(三三九) 梵窠は禅僧、『隔窠記』に、
(三四〇) 寛文三年三月晦日(三十日)、「勝定院雪岑梵窠東堂、今日遷化也。」

と録する。即ち、字は雪岑。勝定院は、相国寺の塔頭である。俗の享年、(四二)八十二。其の詩什・筆蹟で余の知つたものに、後鳥羽院四百年忌御会短冊が有る。

注一 此の稿の骨子は、岡山から帰京して直ちに、昭和三十九年十二月八日、史料編纂所有志者等に対する『文選』講筈に於て課外に講話し、次に又、昭和四十年十二月二十三日、史料編纂所の研究会第百五回(『東京大学史料編纂所報』第一号、所員研究活動、(一)恒例研究会、『白氏五妃曲』発見、四四頁、参看)で口演した。

二 岡山市津島にある本館。

三 昭和三十九年十一月二十七・二十八日、東京大学 史料編纂所の命に依る山陽方面出張の一環として。松島栄一・山本武夫両氏と行を俱にして、助けを得ること少くなかつた。

四 其のほか文書・地図等あり、全部合計して約四万冊、昭和二十四年創立された岡山大学へ、同二十五年三月及び同三十四年春(追加)に、池田家から移譲され、同学附属図書館に保管されてゐる。(同文庫ノ概観ニツイテハ、『池田家文庫仮目録』(注七参看)池田家文庫についての解説、『岡山大学附属図書館要覧』(昭和38年10月、同館)20池田家文庫について、『岡山大学開学15周年記念大学祭/池田家文書その他展示目録』(昭和39年11月3日、同学附属図書館)池田家文庫について、等参看。ナホ、『岡山大学所蔵/池田家文庫解題』(昭和二十八年、同学附属図書館)モ出サレテキル。

五 和学・有識故実等に精しかつたひとの旧蔵ゆゑ、其の方面の書が多いのは自然当然である。

「トヒ ツネヒラ 土肥 経平 、、宝曆十四年忌諱に触れ蟄居を命ぜらる、〔○備前国上道郡〕宇治郷の別業竹裡館に居りて優遊餘年を送り専ら著作に従事す、著に軍器考補正、春濠浪話、花鳥芳囀、深山桜、鐵直垂考、本朝細馬考、寸鍔之塵、備前名所記、備前軍記、田鶴のすさび等あり、其の女某、五条為環に嫁せるを以て京師の縉紳家、出入し秘府の典籍をも窺ふを得たり、就中その著田鶴のすさひの如きは仙洞の叢覽に入りしとして其の書の卷末に自ら其の光栄を記せり、生涯手写せしもの無慮千餘巻号して経平秘函と曰ふ、皆本朝の史書にして未だ梓に上らざるものに係る、、、当時伊勢貞丈の如き名家も経平の学の精蘊を称せり、湯浅常山、、、経平と和漢文学の疑義を論難し、其消息載せて湯土問答にあり、宝永四年に生れた天明二年十月二十日歿す年七十六、〔岡山県人名辞書、一二七葉〕(著書名ノ部分、私二句読ヲ改訂シタ所ガ有ル。批点モ私ニ加ヘタモノ)。

六 固より、岡大図書館が「藩の諸記録が、ほとんど完全に近い形で、まゝ保存されていることは、全国の諸藩の中でも数少ない事例の一つであつて、、、藩政史の研究はもとより、広く江戸時代封建社会の研究の上にもつ史料の価値は、極めて高いものがある」と誇る如く(「要覧」(注四参看)、13頁。又、池田家文書その他展示目録(注四参看)参看)、池田家文庫の中心・大体は藩政史料にあるけれども。

七 『池田家文庫仮目録』岡山大学附属図書館、油印。第一・二編、一冊、昭和二十七年。追加、一冊、昭和三十五年。引用は、第二編図書之部、土肥経

平文庫、68頁上段。

八 書名の上に、番号、「3031」、冊数の下に、函架、「九ノ箱」と記されてゐる。

九 第十二編之一。慶長八年四月一日(丁亥)。二二二頁以下。
一〇 原文は、引用の前に「是ヨリ先キ、」引用の後に「是日、之ヲ山科言経、西洞院時慶等ニ頒テ賜フ、」とある。

一一 慶長八年正月廿一日戊寅、「巳刻、参内。『白氏文集』之中、上陽人・陵園妾・李夫人・王昭君詩四五首・長恨哥伝等、『五妃曲』ト名て被撰抜、以一字板、百部被新摺。細工之衆ニ予申渡者也。」

一二 慶長八年四月一日丁亥、「一、禁中ヨリ、『白氏五妃曲』上陽人李夫人 陵園妾 昭王君 等也。(○昭王、本ノマヽ)一冊、被拝領了。忝者也。去春新刊ニ被仰付了。」(○下略)(史料編纂所、貴重ノ原本、第二十八冊)

一三 『時慶卿記』慶長八年四月一日条も引かれてゐる。

一四 五妃曲の印刷部数は百であつたと云ふが。注一一参看。

一五 内題にも外題(題簽)にも。注一六参看。

一六 土肥本の様態について、左に記述する。

写本。一冊。袋綴。縦七寸七分五厘、横五寸五分五厘。墨附十三葉。(奥ニ白紙一葉ガ有ル)表紙(前表紙モ後表紙モ)、文様を藍色で刷つた千代紙風の紙を使つてある。(此ノ外モ、多ク土肥本ハ、文様アル紙ヲ以テ装訂シテキル)表紙(前・後共)の裡面は、襖紙の反故を用ひてある。(「詠一首和」ノ秋風)「小山田のほなみ」ノ秋風を吹ノ秋窓」ナドノ文字ガ窺ハレタ)。「白氏五妃曲」と筆書した題簽(料紙ハ白。縦五寸五厘、横一寸一分強)を表紙の左肩に貼る。表紙の右肩には、「土肥遺書ノ第二一五号ノ一冊」と記した票(活版刷ニ、数ノ字ヲ墨デ書キ入レタ。明治・大正間ノモノト見エル)が貼附されてゐる。

藏書印記は、(一)細長い木の葉四枚を放射×状に(葉ノ根モトノ方ヲ中心点ニ集メテ)置いた印(匡郭モ文字モ無イ。対角線ノ長サ一寸四分五厘)を黒捺してある、第一葉右辺中央より少しく下に。此の印、他の土肥本にも存し、土肥の所用であらうか。(二)「本池ノ田家ノ藏書」朱印(朱文。方一寸四分五厘)、第一葉右肩に。(三)「岡山ノ大学ノ圖書」朱印(朱文。方一寸四分五

厘)、前表紙見返しに。

本文について。毎半葉九行、毎行字数、散文の個所は十六字、詩は七言二句を一行に書き、毎句の上、空一格。界間は施さぬ。第一葉右、第一行、頂格より、「白氏五妃曲」と首題を記す。第二行、二格下げて、詩題「上陽白髮人」。第三行、一格下げて、詩の本文「上陽人」。次下、此に倣ふ。但し、長恨歌伝の本文(毎行十六字)は、頂格から書き起してある。

一七 万治三年は、勅版刊行の年よりは五十七年後。

一八 第十三葉右、五行で本文が終り、面を更めて、十三葉左第一行より、

奥書、

「コノ一札(○冊カ)五妃曲ノ点ハ、勝定院梵盜モトヨリ所持セラレタルヲ、一トセ(○一字拾頭)太上天皇御タツネニヨリ奉ラレタルニ、一段ノヨキ点ナリカタコトラシキ処アレトモ直ノスヘカラサル由ノ(○一字拾頭)勅アリケルト語ラル。故ニ借り來テ写ス。(○空一行)ノ万治三庚子首夏七日夜写畢。」(句讀、私ニ加フ)。

一九 注一一参看。

二〇 白氏五妃曲が若しや朝鮮で編組されたものであるやうなことはなからうかと、念の為、前問恭作氏『古朝鮮譜』を検しもしたが、其の名を見出さなかつた。

二一 五妃曲の此の排列は、白氏文集に於ける先後・順序に一致する。①上陽白髮人ハ文集卷第三、②李夫人ハ卷第四ノ第十六首、③陵園妾ハ卷第四ノ第十七首、④長恨歌伝ハ卷第十二、⑤①王昭君ハ卷第十四、⑤②昭君怨ハ卷第十六。但シ、文集ハ、四部叢刊景印那波道門活版本。一思ふに、五妃曲は原集に於ける順序そのまま、で抜き列べたのであつて、別に独特な意味を持たせて排置したものではなからう。

二二 言経卿記には、(1)上陽人 (2)李夫人 (3)陵園妾 (4)

長恨歌 (5)王昭君。(注一二参看)

一方、慶長日件録の記す所は、(1)上陽人 (2)陵園妾 (3)李夫人 (4)王昭君詩 (5)長恨歌伝で(注一一参看)、少しく相違が有るが、言経卿記の方が、本が出来上りそれを手にした上での記述であるから、こちらが実状であらうと、原則的の判断を下すことができよう。

二三 ①から④まで、例へば長恨歌と言へばもう隠れも無いことで、言経脚記や慶長日件録の記載(注一二・一一参看)によるだけでも内容を知るにこと欠かなかつたわけであるが、「王昭君詩」(慶長日件録)「王昭君」(言経脚記)とは、それだけでは、どの詩であるか確実には知られなかつたものである。

而も、慶長日件録には「王昭君詩四、五首」とあるけれども(注一一参看)、土肥本を知つて見ると、実は三首に止まること分つた。白氏文集(那波本)で、其の三首の外に、王昭君に關係ありさうな詩題を探すと、「過昭君村」(卷第十一、感傷三、古体、五言)が存しはするが。昭君村ハ、王昭君ノ生レタトコロデアル。一

二四 字句の異同。文集四部叢刊本―上段―に對校して、五妃曲土肥写本の文字―下段―を示す。但し、主要なるものに止め、又、字配りなどの点までは触れ及ばない。

〔第一表〕

②李夫人

第十二葉右、第一行、秦陵 秦陵

③陵園妾

十二右、六、将奈何 将如何

十二左、四、眼看菊藥 眼看菊藥

④ノ1長恨歌伝

十三右、三、忽忽不楽 忽々不楽

十三右、六、若有願遇左右前後 若有遇願左右前後

十三右、八、鬢髮膩理 鬢髮膩理(鬢、下記清原本作鬢)

十三左、四、垂金璫 垂金璫

十三左、七、舉上行同室(鞞止同ナシ)

十四右、六、出入禁門不問(名姓ナシ) 與上行同鞞、止同室、出入禁門不問名姓

十四右、八、看女却為門上楣(君ナシ) 君看女却為門上楣

十五左、二、上多樓閣 上多樓閣

十五左、三、雙童女 雙童子

十五左、九、且日 且日

十七右、四、家是是邑 家是邑(于ナシ)

④ノ2長恨歌

十八左、四、廻看血淚相和流 廻首血淚相和流

十八左、五、峨嵋山下 峨嵋山下

十九左、一、君王展轉思 君王展轉思

○上陽白髮人・李夫人・陵園妾については、神田喜一郎氏蔵文集 新樂府(古典保存会景印)―上段―とも對照して置く。

〔第二表〕

①上陽白髮人

第八葉左、第三行、上陽白髮人(注) 慙、怨、曠、也、上陽白髮人

(注ナシ)

八左、七、採扱 採扱

九右、一、必承恩 便承恩

九右、三、空床 空房

九右、四、無睡 無寐

九右、七、鶯婦驚至(左旁注「去」) 情悄然 鶯婦燕去長悄然

九左、一、天家 大家

九左、三、畫(左旁注「又點」) 肩 點肩

九左、三、四、天寶年中 天寶末年

②李夫人

一二左、二、李夫人(注) 鬢、髮、慙、也、李夫人(注ナシ)

一二左、三、初喪李夫人 初喪李夫人

一二左、四、君恩未、尽 君恩不、尽

一二左、六、愁殺君 愁殺人

一二左、七、九華帳深 九華帳中

一二左、七、反夫人魂 降夫人魂

一三右、一、縹紗 縹紗

一三右、二、翠娥 翠娥

一三右、三、魂之不來兮 魂之不來(兮ナシ)

一三右、五、還(右旁注「遙」) 見為 還見違

一三右、五、武皇(右旁注「漢武」) 帝 漢武帝

- 一三右、五、多若斯、皆若斯
- 一三右、八、艷骨、艷質
- 一三左、一、尤物惑人、尤物惑人

③陵園妾

- 一三左、三、陵園妾(注) 隣、幽、閉也、 陵園妾(注ナシ)
- 一三左、四、陵園妾、 陵園妾(反覆セズ)
- 一三左、五、將奈何、 將如何
- 一三左、五、年月多(反覆セズ) 年月多年、月多
- 一三左、六、拔鬢疎、 鬢鬢疎
- 一三左、七、繫裙慢、 繫裙緩
- 一三左、八、憶在宮中、 憶昔宮中
- 一四右、一、山宮一鑠、 山宮一閉
- 一四右、一、不合出、 不令出
- 一四右、三、聞蟬聽罷、 聞蟬聽燕
- 一四右、四、手把梨花無人見、 把花掩淚無人見
- 一四右、八、我爾、 我同

○又、長恨歌並びに伝については、竜門文庫叢刊清原本長恨歌并琵琶行所収本(注三三参看)―上段―とも対照して置く、

〔第三表〕

④ノ1長恨歌伝

- 第一葉右、第四行、委於右丞相、 委于右丞相
- 一右、四、稍深居遊宴、 深居遊宴(稍ナシ)
- 一右、六、雖有良家子千萬數、 雖良家子千數(有・萬ナシ)
- 一右、七、忽々不樂、 忽々不樂
- 一左、一、焜耀景從、 焜耀景從
- 一左、三、恍若有遇、 若有遇(恍ナシ)
- 一左、七、賜藻、 賜藻、 登
- 一左、七、既出々々、 既出水(々ナシ)
- 二右、三、以導之、 以導之
- 二右、四、垂金璫、 垂金璫

- 二左、三、八十一女御妻、 八十一御妻(女ナシ)
- 二左、五、獨能致是、 致是(獨能ナシ)
- 二左、六、善巧嫵倭、 善巧便倭
- 二左、七、列在清貫、 列在清貫
- 三右、五、生男勿喜歡、 生兒勿喜歡
- 三右、六、君看女却為門楣(「上」ナシ) 君看女却為門上楣
- 三右、六、天下心、 人心
- 三左、六、敢亦言者、 敢言者(「亦」ナシ)
- 三左、七、不如塞天下之怒、 塞天下怒(「不如」・「之」ナシ)
- 四右、五、自南宮遷于西内、 遷于西内(自南宮ナシ)
- 四左、一、霓裳羽衣之一声、 霓裳羽衣一声(「之」ナシ)
- 四左、七、又不見、 不見(「又」ナシ)
- 五右、一、東極絶天海、 東極天海(絶ナシ)
- 五右、三、闕其門、 闕其門
- 五右、四、雙鬢童女、 雙童子(鬢ナシ)
- 五右、六、誥其所從來、 誥其所從(来ナシ)
- 五左、三、延入、 迎入
- 五左、三、四、且日、 且日
- 五左、四、被紫綃、 披紫綃、 紅玉
- 五左、六、天寶十四載、 天寶十四年
- 五左、七、閨默指碧衣女、 閨默指碧衣(女ナシ)
- 六右、一、拆其半、 拊其半
- 六右、一、為我謝、 為謝(我ナシ)
- 六右、四、得不聞于他人、 不為他人聞(得ナシ)
- 六右、七、言曰(「之」ナシ) 言之曰
- 六左、三、宮掖之間、 宮掖間(「之」ナシ)
- 六左、四、時夜殆半、 夜殆半(時ナシ)
- 六左、五、憑肩、 凭肩
- 七右、二、或為天子、 或為天(子ナシ)

- 七右、三、亦、不久人間 不、亦、不久人間
七右、五、日(反覆セス) 不豫 日日不豫
七左、一、瑯琊、琅邪、
七左、一、家、于是邑 家是邑(于ナシ)
七左、二、語及此事相共感歎 語及此事相與感嘆
八右、一、垂於將來(也ナシ) 垂於將來也
八右、四、九左、三、長恨歌ヨリ歌曰マデ ナシ
- ④ノ2長恨歌
九左、五、養在深窓、 養在深闈、
九左、七、回頭一笑 廻眸一笑
一〇左、四、緩歌慢舞 緩歌縵舞
一一右、一、蛾眉 蛾眉
一一右、五、蛾眉山下 蛾眉山下
一一左、一、天旋地、 天旋地、
一一左、三、沾衣 露衣
一一左、六、花開日、 花開夜、
一一左、七、落葉滿階 宮葉滿階
一一右、二、秋燈挑盡 孤燈挑尽
一一右、三、遅々鐘漏 遅々鐘鼓
一一右、四、舊枕故衾 翡翠衾寒
一一右、六、能以精神致魂魄 能以精誠、致魂魄
一一右、七、君王展軔思 君王展軔思
一一左、一、排風馭氣 排空馭氣
一一左、四、樓殿、 樓閣、
一一左、七、夢魂驚 夢中驚
一一右、二、雲鬢半偏、 雲鬢半垂、
一一右、三、飄々、 飄飄々々
一一右、四、淚闌干 淚闌干
一一右、五、渺茫、 渺茫、
一一左、七、無絶期 無盡期

未だ精査に至らぬが、大ざつばに、第一表—那波本との対校—の方が彼此異同の数量少く、第二・三表—神田本や清原本との対校—は異同多いことを見れば、五妃曲の本文の系統・所屬について多少の示唆も与へられるであらう。

(ナホ、後陽成天皇勅板長恨歌琵琶行—貴重圖書影本刊行会景印—所収ノ長恨歌并ビニ伝ハ、同ジク勅版デアルカラ、五妃曲本ト同ジ本文デハナイカト豫期スルト、実ハソレ程デナイ。而シテ、那波本ガ歌行所収本ト殆ド同一ト認メラレ、随ツテ、五妃曲本ト歌行本トノ間ニハ、大体第一表同様ノ異同ガ示サレル。一タゞ、那波本ノ「鬢髮賦理」、歌行本ニハ、五妃曲本ト同ジク、「鬢髮賦理」)

二五 いさゝか啓蒙的に墮するけれども、

二六 以上三首①②③は、並びに、白氏文集のうち「新樂府」に属する。

二七 白楽天の「王昭君」の一首には、昭君、匈奴に遣られて、『愁苦辛勤』苦勞憂愁に、『顛顛シ尽キヌ、』さしもの美貌もすつかりやつれ衰へて、『如今ハ却リテ画図ノ中ニ似タリ。』画家にまひなひしなかつた為に描かれてしまつた醜い肖像、嘗ては偽りであつたのに、今では却つて実になつて、王昭君の容貌はその肖像通りに醜くなつてしまつた、と作つたのは巧妙である。

二八 白楽天の作意が、上陽白髮人は「慙怨曠也」、李夫人は「鑿髮惑也」、陵園妾は「憐幽閉也」(一本、「託幽閉、喻被讒遭黜也」)——並びニ原注—であつたにしても、五妃曲を編者が取集めた意趣にあつては、さうした諷諭は、忘れたか棄て去つたか或は又二の次だつたことであらう。

二九 慶長勅版より先、同じく後陽成天皇の御宇文祿年間に、文祿勅版とも言ふべく、一書の印行が有つたが、それは、亦、古文孝経であつた。

三〇 和書にせよ漢籍にせよ、

三一 五妃曲も、中の一つ一つは昔の白楽天の作品であつて古典に属することでは、他の慶長勅版と変りも無いけれども、

三二 例証若干を挙げて置けば、三条西実隆が、琵琶引・長恨歌を書写して禁裏に進上し「実隆公記、文明九年十一月九日」、又、琵琶行・長恨哥を書し、三条西公条が加點して、杉勘解由に遣した。(同記、天文二年正月廿四日)

次に、遺物的史料として、弘治二年写本琵琶行・長恨歌〔竜門文庫善本書

目、第二、二四四、90頁)、清原宣賢書写并に書入れの長恨歌并琵琶引(同書目、第二、二四三、89頁・阪本竜門文庫複製叢刊之四)、天正四年清原校賢移点の長恨歌・琵琶行(宮内庁書陵部蔵転写本。前記叢刊「長恨歌・琵琶行」解説、川瀬一馬氏、九一〇頁ニヨル)、抄物で、天文十二年八月講義奥書、清原宣賢筆の長恨歌并琵琶行秘抄(指定文化財総合目録、重要文化財の部、国、京都大学保管、一一一頁)、室町時代書写、「宝珠院蔵本」印記ある長恨歌并琵琶行抄(竹柏園蔵書志、五七、漢書、五五八頁)などがある。

又、長恨歌・琵琶行に、妙なことながら野馬台詩を加へた組合せ―所謂『歌行詩』―も、遺本少くない。「天文十八己酉年十月二十一日書之畢。俊貞之」の奥書ある写本(東京大学図書館EASTAS)、天正十年写本(岩崎文庫和漢書目録、古写本、室町期織豊期、七頁)、室町時代写本(前掲「長恨歌琵琶行解説」、二頁。川瀬一馬氏蔵)、室町末期写本(成實堂善本書目、第一篇旧鈔本、三七頁)、等。

なほ、唐の宣宗の「弔白居易」詩を読むと、次の如くである。

「綴玉聯珠六十年、誰教冥路作詩仙。浮雲不繫名居易、造化無為字樂天。童子解吟長恨曲、胡兒能唱琵琶篇。文章已滿行人耳、一度思卿一愴然。」(全唐詩、第一函第二冊)

即ち、白樂天の詩を小さな子どもも言語の違ふ異民族も唱ふとして、其の作品名を挙示したのが長恨歌と琵琶行とであるのを見れば、本国支那に於て既に、格別に此の二篇が人々の口に登つてゐたことが知られるのであつて、日本で歌行を取別け・相並べること、固より人情の自然当然の帰著でもあらうけれども、或いは亦、かゝる彼土に於ける状況から、直接ならずとも間接に、由来する所が有つたのではなからうかと、私は推測し、日本漢籍史上興味あることと思ふのである。

三三 かなりに詳細な訓点・仮名である。

三四 他の慶長勅版本いづれも、古活字本の大概の例の如く、訓点の附印は無い。鈴鹿三七氏編『勅板集影』等参照。

三五 注一八参看。

三六 太上天皇は、多分、後水尾院であらうか。

和田英松先生の『皇室御撰之研究』(第二、後水尾天皇、三八〇頁)による

と、『後水尾院碧梧御両吟狂句』に「梵峯一「句」が入つてをり、又(第二、光嚴天皇、二五七頁)、梵峯が『光明院(○或ハ光嚴院カ)尊儀御遺誠』を書写してゐて、その奥書は、

「正保四(丁亥)八月、右御遺誠、天竜仙長老獻仙洞、尊覽則楷法実雖非宸翰、蒙綸命令謄写矣。梵峯」

とあると云ふ。かやうに、梵峯は後水尾院・仙洞と近づきを見せてゐて、五妃曲土肥本奥書の、梵峯が点本を太上天皇にたてまつたといふ事と、好く調和する。

三七 梵峯が新たに加点したものは思はれない。長恨歌并伝の部分の訓点を、例へば竜門文庫清原本長恨歌并琵琶引(注三三参看)のそれと対照すると、合ふものも有つて、大体、さうした旧来の点に移されたと考へられる。

三八 土肥本の訓点で、少くとも近き世の漢文読法に比べて、非凡・優雅・気が利いてゐると感ぜられるもの、(必ズシモ土肥本独特トハ言ヘナイガ、一注三七参看)若干を挙げれば、

①上陽白髮人

「玄宗末、歲初、選入 入時十六、今六十」、選入入時を、「選ハレマイリテ マイリン時ハ」

「扶三入車中、不_レ教_レ哭_レ」、扶入車中を、「車ノ中ニカシツキノセラレテ」

「一生遂向_ニ空房_一宿」、向空房宿を、「ムナシキネヤニ向テイネタリ」

②李夫人

「是耶非耶、兩不_レ知」、是耶非耶を、「ソレカアラヌカ」

③陵園妾

「紅玉膚、銷_レ繫_レ裙縵」、繫裙縵を、「モノコシヲユフコト(○以上左点) ユルシ」

④ノ1長恨歌伝

「玉妃方寝、寝を、「ヲトノコモレリ」

「左右侍者七八人、侍者七八人を、「ヲモトヒトナ、ヤタリ」

「夜殆半」、殆半を、「半ニナンクトシテ」

④ノ2長恨歌

「夜半無_レ人私語時」、私語を、「サ、メコトセシ」

三九 壺は、魚金切〔広韻〕。

四〇 史料編纂所2073-192写本、第廿五冊。

四一 『相国寺』塔頭末派略記并歴代』「勝定院」の項に、「雪岑梵壺 嗣汝雪〔法〕叔 位于南禅 兼領善応院 寛文三年癸卯三月晦日示寂（〇寂）世寿八十一」（史料編纂所226-5騰写本）

又、『南禅住持籍』（史料編纂所344-20騰写本）にも、「第二百七十九世」の次に、「準南禅 雪岑和尚（諱梵壺 嗣法汝雪叔 夢窓派 万治三年庚子三月廿九日賜帖 寛文三年癸卯三月晦日示寂 世寿八十二歳）」（梵壺ニツイテハ、玉村竹二君ノ教ヘニヨツタ所ガ多イコトヲ感謝スル）

四二 「曉落葉（〇三字他筆）／一冬松下水村栖、雜樹受風声不低、／枕上無閑葉耶雨、捲簾曉月在吾西、／梵壺」弥富破魔雄氏所蔵（史料編纂所195-3488写真）。光勝・紹益・光広の短冊が一緒になつてゐる。

追記一 川瀬一馬氏『古活字版之研究』の増補版が昭和四十二年に発行されたが、中巻、補訂篇、追記、九五頁に、史料編纂所報第一号（注一参照）にもとづいて、土肥本五妃曲を早くも記し入れられたのは、大変うれしい。

追記二 山陽方面出張について略記する。○第一日、京都大学文学部国史研究室の『大日本史編纂記録（原題往復書案）』を調査し、目録を取つた。

○第二日も、右の調査を続ける。人文科学研究所にも立寄つた。朝、鳥部野に廻つて、山腹満面墓石がひしめき合ふ、無常感どころではない一種の壮観に驚く。但し、死後にも世間の風は荒いか、新墓が取つて代り、古墓は少い。

○第三日、修理成つた姫路城に登つた後、兵庫県竜野市立図書館で旧領主脇坂家の文書・記録・書籍（総計一四八六点）と此の地方の学者の旧蔵書を概観した。これらの品目は『竜野文庫図書目録』前編・後篇古文書篇（昭和三十四・三十五年）に掲げられてゐる。学者旧蔵書は、見晴し絶佳なる裏山の瀟洒な別館に収蔵してある。鹿島守之助氏が当地出身で父永富撫松（漢詩人）の記念に建築を寄附したのである。之を賞讃すると共に、脇坂本を置く本館の木造老朽に慄然として、これが新築も寄進されたらば、美善完璧であらうと感じた。

○第四日に岡山大学図書館に赴き、池田家文庫を覽たのである。文庫運営委員の教官がたが集つて歓迎して下さいました。後楽園入口にある古陶館にも行つて、古備前焼の銘を写し取る。又、県立文化センターの郷土資料室を訪うた。

○第五日、松島・山本は倉敷市に向ひ、倉敷考、古館・大原美術館等を観る。文化センター倉敷分館には郷土史家永山卯三郎翁の旧蔵本がはひつてゐる。太田は、岡大図書館で、白氏五妃曲の書写を続けた。そのあと、三人、岡山美術館に赴く。途中、旧藩校、泮池のみ残つてゐるのを見た。美術館は、林原一郎氏が譲り受けた池田家の古美術品類を中心として、昭和三十九年設立されたもの、書画・能衣裳・調度・刀剣・甲冑・陶磁器等が陳列されてゐる。『清明山河図』も目に入った。但し、我々が目的としたのは、『池田光政日記』で、岡山大学に入らず、こゝに置かれてゐる。夜、福田英子の生地野田町を過る。

○第六日、大西祝の雅号の所拠操山を仰いで、藤野に向ひ、万波家の地方史料を見たが、大学とか郷土資料室とかに移して保存する要が有りはせぬか。同家は家屋も古民家として貴重されて、改造もできず、「見学者が『お家を大切に』と言つて帰るが、中に住む人は大切にしないでいいのかしら」と家人がかこつ。僕「御家も文書も人も御大切に」と挨拶し、皆笑つて賑かに別れた。

次に閑谷費。費は遺蹟といふだけではなく、こゝに、継続して教育活動が行はれて来たこと著しく、延いて県立高校分校が存したのであるが、前年廢せられて、伝統断絶したのは、嘗て地方人士のみの痛嘆であらうか。費の講堂は床がツルミだ。閑谷中学時代に生徒がこゝの掃除を光榮として従事して磨き上げたさうである。閑谷神社で蕃山了介の書状を閲した後、費の経始に尽力した津田永忠の屋敷址を經、再建ながら黄葉亭に、講官・生員が酒酌み詩を賦した風雅をしのぶ。又、費の現存建築を去ること遙かな地点に、頂が擬宝珠形の石柱が半ば埋れて立つのは費の石門であつて、嘗ての費地の壮大に驚歎した。午後、備前町穂波まで南下し、『万葉集総索引』などでちみに学界に益した故正宗敦夫氏の正宗文庫を訪ふ。稀書珍籍固より充棟であるが、余としては、

「正安二年五月二日以中院三位（有房卿）／本書写之畢
本云 文永五年二月廿一日以菅家本／書写之畢 在判」の奥書ある『長

恨歌』旧鈔の裏書によつて、嘗て私が蒐輯した『唐曆』佚文（山田孝雄追憶史学語学論集「『唐曆』について」）に一条を補ひ得たのを喜びとした。云く、「唐曆卅四、肅宗詔追贈故妃楊氏為元献皇后。」（長恨歌伝「元献皇后」裏）正宗家を辞して海岸に降る。教夫の兄白鳥の『入江のほとり』の舞台。水も舟も静止し見てゐる我が身さへ動かなくなつてしまふ夕暮、出張を終了した。